

# 年

末といえは異種格闘技戦とい  
うのが、いまや第九とならぶ  
定番となった。プロモーションのお  
陰もあるとはいえ、それなりに人気  
を保ち続けているのは、きつと人々  
の心性に根ざす理由があるのだろ  
う。一年間、積もり積もったケガレ  
を、肉体同士のシンプルでピュアな  
闘争を見ることで払い落とそうとい  
う、いわば厄払いの意味があるのか  
もしれない。

自分とはいえば、子供のときから  
ケンカや争いごとが苦手なのだが、  
旅をしていると、

ときにはあまりの  
理不尽さに耐えが  
たく、ケンカせざ  
るをえないときも  
ある。しかし、そ

の場合、国や文化の違いによって、  
自分の怒りが効果的に伝わらないこ  
とがある。これも一種の異種格闘技  
戦なのである。

エジプトに暮らし始めたころは、  
外に出るたびにかならずといてい  
いほどケンカになった。タクシーに  
乗ればぼったくられる、買い物です  
ればおつりをごまかされる、門番に  
頼みごとをしてもまったくやろうと  
しないなどなど、こちらの神経を逆  
なですするような対応に、毎日のよう  
に腹を立て、声を荒げ、疲れ果てて

家に戻った。

しかし、怒りを露わにして怒って  
も、こちらの意図が、どうも相手に  
伝わっていないようなのだ。むしろ、  
こちらが怒るほど、相手は不審がり、  
しまいには逆にこちらを悪者扱いし  
始める。こちらの怒りは、相手の怒  
りをかき立てるだけに終わり、後味  
の悪い結果となってしまふのだ。  
経験を重ねるうちに、いくつかわ  
かったことがある。同じ怒るにして  
も、自分の気持ちを相手に伝えるた  
めには、相応のテクニクがいる。

## 旅の曲者

34

### 旅の異種格闘技戦

文・写真／田中真知  
Tanaka Mochi

イラスト／bozen

それは相手のプライドを傷つけない  
こと、周りを味方につけること、そ  
してユーモアを忘れぬことである。

プライドを傷つけられることをな  
により嫌うエジプト人は、同時に相  
手のプライドを傷つけることを恐れ  
る面がある。たとえ怒るにしても、  
「おまえの行為は僕のプライドを傷  
つけた」というメッセージならば相  
手は態度を和らげるのだ。つまり、  
おまえがこういうことをしたのは、  
私をバカにしているからかという言  
い方をするのである。

さらに周囲の人たちに自分の正当  
性をアピールするのも効果的だ。こ  
れだと相手のプライドは傷つかない  
し、周りの人たちが結果的に仲裁役  
になってくれる場合が多い。

もう一つのポイントがユーモアで  
ある。自分のペースに持って行き  
たいときには、どんなに腹が立って  
いても、あえて冗談を口にする。実  
際にはやってみるのはなかなか難しいの  
だが、効果はてきめんである。

ただし、こうした対応が通じるの  
はエジプトだからであって、他の国

には、またちがう怒りの伝え方の文  
化が存在する。

インドネシアを訪れたとき、お土  
産屋でふっかけられたことがあった。  
エジプトのときのくせで、こんな高  
い値段はバカにしている、こんな店  
ではとても買えない、といって腹を  
立てて帰る素振りを見せた。エジプ  
トならば、こんな態度をとると、ち  
よつと待て、わかった、安くするか  
らと呼び止めてくるのが常である。  
ところが、ここでは事情が違った。  
店の者は呼び止めるどころか、かえ

って腹を立ててしまい、「おまえに  
なんか買ってもらわなくなつてい  
い」というと、店の奥に引つ込んで  
しまった。文化や民族性が違つと、  
プライドのありかも異なるのだ。

しかし、店の奥に引つ込んでしま  
うくらいならまだいい。相手のプラ  
イドのありかを読み違えたために、  
とんでもないことになる場合もある。  
エルサレムの宿にいたとき、旅行

者同士で、これまで旅してきた中で、  
どこの国の人たちが一番ケンカに強  
いだらうという話題になったことが  
ある。その国の特定のだけかではな  
く、一般的な意味でケンカに強い国  
民というのを考えたのだ。

「イスラエル人はけっこう強いかも  
しれませんね。あんな歴史だから執  
念深さは人一倍だし、プライドも高  
い。それに体を鍛えている人が多い  
ですからね」

「アラブ人は一見怖そうだけど、こ  
ちらが強い態度に出ると、すぐ弱気  
になりますね。殴り合いにまで発展  
することは、まずないです」

「中国人も、口ではがながん言つて  
くるけど、腕力に訴えるというところ  
までは行かないなあ」

「アフリカ人は身体能力は高いけど、  
ケンカとなると足腰が弱そう」

みな、それぞれの体験に基づいて  
言いたい放題ではあったが、驚いた

ことに、一番ケンカが強い人たちと  
いうことで意見が一致した国があ  
る。かの横綱・朝青龍の国、モンゴ  
ルである。

「モンゴルに長く住んでいる人に、  
ここでは絶対ケンカするなって言わ  
れましたよ。草原で体を鍛えている  
から腕力がすごい。それに子供のこ  
ろから相撲をとってますからね」

「それは私も言われました。けっし  
て弱音は吐かないし、戦うとなつた  
ら後には引かない人たちだから、絶  
対に争うなど言われませんでしたよ」

かくいう自分もモンゴル人の強さ  
は肌で知っている。モンゴル旅行中、  
草原のドライブインで一泊した晩、  
近所の遊牧民の若者たちがそこにや  
ってきた。言葉は通じないので、わ

れわれが持っていた酒をごちそうし  
て交流するうちに、相撲を取ろうと  
いうことになった。

どうしてそんなことになったのか  
わからない。今の朝青龍の強さを知  
っていたら、軽々しく相撲をとろう  
なんていう気にはならなかったと思  
うのだが、このときは酔っていて気  
分が大きくなっていった。文化交流の  
親善相撲だからいいことを考えてい  
たのだと思う。

ところが、組み合ってみて驚いた。  
服の上からではわからなかったのだ  
が、腕は丸太のように太い。しかも、  
凄まじい力である。あつというまに  
投げ飛ばされた。おいおい、親善相  
撲じゃなかったのか、少しは手加減  
しろよといったいのだが、言葉は通  
じないうえ、相手の顔つきは真剣そ  
のものである。彼らにとつては、こ  
れは民族のプライドをかけた真剣勝  
負なのだと思つたときはもう遅  
かった。

モンゴル式の相撲は続けて何番も  
とる。相手はこちらが立ち上がると、

すぐにまた向かってくる。手加減も  
なく、全力で倒しかかってくる。  
彼らだつてかなり飲んでいたはずな  
のだが、ふだん50度の酒をあいさつ  
がわりに飲んでいることを思えば、  
あれしきの酒ではしらふ同然だつた  
のかもしれない。酔いの回りもあつ  
て、ほくは何度も投げられた末、途  
中でダウンして、そのまま寝てしま  
った。

翌朝起きると、われわれと一緒に  
相撲をとっていたS君が足を怪我し  
て立ち上がれないという。聞けば、  
あの後も相撲が続き、S君は倒れた  
拍子に相手の体重を足首に乗せたま  
ま倒れてしまったのだという。遊牧  
民たちは勝負あつたと満足したの  
か、明け方に帰っていったらしい。

首都に戻って病院に行くと、S君  
の足首が折れていることがわかっ  
た。S君は「自分が弱かったわけ  
はない」と主張するものの、当然な  
がら、S君にはモンゴルの遊牧民と  
相撲をとつて足を折られた男という  
レッテルが貼られてしまった。



ヨルダンの空手道場で出会った「国際選手」



## 田中真知

たなか まち

「プロフィール」1960年東京生まれ。作家・翻訳家。  
1990年より1997年までエジプト在住。著書に「ア  
フリカ旅物語」(北東部編・中南部編、凱風社)「ある夜、  
ピラミッドで」(旅行人)、訳書にグラハム・ハンコック  
「神の刻印」(凱風社)、「惑星の暗号」(翔泳社)など。